

急増する乳がん、子宮がん

文=山田 朋枝(保健師)

がんの多くは高齢になるほど発症リスクが高まるため、若い方にはあまり関係のない病気だと思われがちですが、「乳がん」「子宮がん」は20〜40歳代で発症するケースが近年、急増しています。「乳がん」「子宮がん」とはどのような病気なのでしょうか。

「乳がん」は、女性がかかる最多のがん

日本人女性がかかるがんの中で最も多いものが乳がんです。特に40歳代後半にもっとも多く発症しています。

自覚症状としては、がんが5mm〜1cmくらいの大きさになると、しこりとして触れることがあります。その他、乳頭からの異常分泌(血性のもなど)、乳頭や乳輪のただれ、えくぼの様なくぼみや乳房付近のリンパ節の腫れなどの症状がみられます。

低年齢化が進む「子宮がん」

子宮の入り口である子宮頸部にできる「子宮頸がん」は20〜30歳代の若年層で増加傾向にあり、乳がんにつづいて2番目に多い日本人女性がかかるがんとなっています。

子宮の奥にある子宮体部にできる「子宮体がん」は40歳代以降、閉経前後に多くみられますが、最近では30歳代での発症も増えていきます。

いずれも、初期にはほとんど自覚症状がありません。進行してくると不正出血やおりもの異常、下腹部痛などがみられるようになります。

「乳がん」「子宮がん」の原因は？

「乳がん」や「子宮体がん」の発生には、女性ホルモンのものであるエストロゲンが深く関わっています。初潮の時期が早い人や閉経時期の遅い人出



産経験のない人などは、その影響を長期間受けているため、乳がんや子宮体がんの発症リスクが高くなります。

「子宮頸がん」は「ヒトパピローマウイルス(HPV)」の感染が原因となって発症します。HPVは性交渉によって感染するため、性体験のある女性の約80%が感染するといわれていますが、感染しても多くの場合、本人の免疫機能が働いて排除されます。ところが、ごく一部のケースでウイルスが排除されずに長期間感染が続く場合に、数年を経て子宮頸がんを発症します。

「乳がん」「子宮がん」

(婦人科) 検診を受けましょう

「乳がん」は早期発見、治療すれば、より高い確率で治すことができ、また、乳房を温存しながら、わずかの切除手術でがんを取り除くことも可能です。

また、初期の「子宮がん」の症状はほとんどなく、自覚症状が現れる頃には病状が進行していることが少なくありません。子宮がん検診を受けることで、がんになる前の正常でない細胞の段階で発見することも可能です。

羽幌町では、今年度も次のとおり婦人科検診を行いますので、ぜひこの機会に検診を受けましょう。

■今年度の婦人科検診

・5月22日(金)〜24日(日)
(4月30日まで申込受付中)
・10月14日(水)

※土日の検診希望の方は5月の健診をご利用ください。